

【水の作文大賞】

水が織りなす命の舞台

熊本県 真和中学校 三年 松岡 可恩

私は、長期休みになると菊池市にある菊池渓谷によく行く。私は川辺に立つと、いつも耳を澄ませてしまう。流れる水の音、鳥のさえずり、そして風にそよぐ木々の音。

それはまるで自然が奏でる交響曲のようだ。この世に生を受けた私たちにとつて、水という存在は何か特別なものだ。

それは単なる液体ではなく、生命そのもの。人間を含めたすべての生き物の命を支えている、まるで地球の血液のようなものだ。

私たちは、水とともにある生活に慣れすぎてその価値を見失ってしまっただけではないだろうかと思う。

蛇口をひねれば水がでる便利さに、私は感謝の気持ちを忘れてしまいがちだ。

しかし、地球上のすべての人達が同じように水に恵まれているわけではないことを考えると、その便利さがどれだけ貴重であるかに気づかされる。

例えば、アフリカやアジアの一部の地域では飲み水を得るために何キロも歩かなければならない子どもたちがいると聞く。

水を運ぶための時間は、子どもたちが教育を受けたり遊んだりする時間を奪ってしまう。その現実には、私は胸を締め付けられる思いだ。一方で、

私たちの日常では、水が当たり前のようにある生活を送っている。この大きな格差を前にして、私たちは何ができるのだろうか。

答えは、小さな行動の積み重ねだ。

節水を心がけること、雨水をためて活用すること、そして水を無駄にしない意識を持つことだ。

一見すると些細なことに見えるかもしれないが、それが集まることで大きな変化を生む。

さらには、学校での環境教育や地域の清掃活動に参加することで、水を

守る輪が広がるのではないかと考える。

また、水は自然環境だけではなく、文化や歴史とも深く結びついている。日本では古くから、川や湖、海をテーマにした物語や祭りがあり、それらは水との共生を教えてくれる。

例えば、熊本県では清らかな水があつて初めて成り立つものがある。これから未来を思うとき、私は「水を守る」という意識を持つことが私たちの責任だと感じる。

水は過去から未来へとつながる命のリレー。そのバトンをしっかりと次世代に渡すために今できることを一つずつ積み重ねて行きたい。

最後に、私がいつも思うことを共有したい。それは、水はただ流れるだけの存在ではないということ。

その背後には、自然の力や人々の努力が詰まっている。水を見るたびに、私たちの命を支えているその力に感謝し、行動を起こす勇氣を持つよう。

それこそが、水が奏でる交響曲の一員となる第一歩ではないだろうか。